



鹿児島県教育

7月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会特別支援学校長部会長

県立鹿児島特別支援学校長
堀之内 恵 司

笑顔で「おはよう」「さようなら」

本校の校長となり、あつという間に二年目を迎えた。毎朝、玄関キャノピーから眺める桜島は、いつも私に「今日も子供たちを頼んだぞ」と語りかけているようである。

校長として、私が毎日続けていることに、児童生徒が登校する際の校内の見回りと、下校時の玄関キャノピーでの見送りがある。登校時の見回りでは、廊下で出会う子供たち一人一人に「おはよう」「今日も元気かな」「一日勉強がんばろうね」と言葉を掛ける。下校時の見送りでは「さようなら」「気をつけて帰ろうね」「明日また会おうね」と手を振りながら言葉を掛ける。この校長からの言葉掛けを楽しみにしているのか、嬉しそうにハイタッチしながら挨拶を返してくれる子供も増えてきた。

私の言葉掛けには、こんなエピソードがある。壁新聞を制作するというので、昨年度の一学期に、小学部の児童から取材を受けた。沢山の質問を受ける中、私も彼に一つ質問をしてみた。「あなたは、私にどんな校長先生になってほしいですか」という問いに対して、彼は「校長先生は、いつも僕たちに『おはよう』『さようなら』と言葉を掛けてくれます。そのとき僕たちは、校長先生からいっぱい元

気をもらっています。どうか、僕たちに笑顔で言葉掛けを続けてくれる校長先生でいてください。」と答えてくれた。一人の教職員として、その魅力を改めて感じた一言であった。

教職の魅力に関しては、今年五月に「かごしまの先生」魅力発信検討委員会から提言書が出されている。全国的に教職員不足が深刻化する中、教職の魅力を積極的に発信し、教職に対するイメージアップを図るため、また、教職そのものの魅力を高めるために、教職員の働き方の改善策を検討するため、本委員会では幅広い議論を重ねられ、提言書としてまとめられたものである。この中には、教職とは児童生徒に寄り添いながら成長を支え、その成長を実感できる素晴らしい仕事であること、また、児童生徒の成長と共に、自分自身の成長も実感できるやりがいのある仕事であることなどが記されていた。校長としても、児童生徒との関わり方を再確認すべきだと思う言葉であった。

笑顔で「おはよう」「さようなら」。
教職の魅力を感じながら、本校で学ぶ児童生徒たちに、その保護者に、そして、共に働く先生方に、校長として、今日もたくさん元気とする気を届けていきたいと思う。

令和7(2025)年7月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



随想



なんか面白い観光協会に

(一社)南さつま市観光協会 会長 上村 敏弘

観光協会の理事会で私はよく「この街を楽しむ街にしよう、楽しいことをやろう」と言います。

先日、の理事会で「会長、楽しいということはそれぞれ違うのでは？」と問われました。私は「そうですね、私の楽しいとあなたの楽しいは違うかもしれないし、市民や観光客となるともっと違うかもしれない、あなたが思う楽しいことで良いのではないですか。すると、「どうせ私一人が提案しても却下されるでしょう」そうとは限りませんよ、あとはあなたの情熱と賛同者の確保ですよ、三人の賛同者がいれば大抵のことはできるものです」と答えました。

全国千七百有余の市町村、また、鹿児島県内にも三十三の観光協会や特産品協会等(県観光連盟加入)や役場内の観光課など何らかの形で観光PR・観光戦略を担う組織があります。これらの観光協会は著名な観光地など一部を除いて、そのほとんどが行政からの補助金や出向職員で運営されています。南さつま市観光協会も約十年前まで同じようなものでした。

南さつま市は二十年前に一市四町が合併し誕生、その一年後に、観光協会も合併しました。七・八年たった頃から一部の理事から、自分

たちの事業や予算は自分たちで決めたいという意見が出始めました。そんな中、砂の祭典を一ヶ月開催したいという市の思惑の中で、その受け皿として観光協会を独立強化しようという動きが急速に動き始めました。それはまた、長期経済の低迷や地方の過疎化・少子高齢化の流れの中で国や県・日本中の市町村が観光に希望を見出し出そうという動きとも相まって、翌年には観光協会を市役所から独立・分離することができ、砂の祭典も一ヶ月開催することになりました。

八月には新しい事務所と職員一人が決まり、その年内には地域おこし協力隊員と二人目の職員が決まり、独自の体制で動き始めました。

この三人のスタッフが優秀で市や県の委託事業を委託先の予想を越える結果を出したので、一気に観光協会の知名度が上がりました。

独立から一年半ほどたったころ、観光協会であるさと納税の業務を受託してくれないかという話がきました。それから新しい事務所への移転や新たなスタッフの募集、行政との受託条件の詰め、社団法人化、臨時総会での承認など慌ただしいなかで翌年四月から法人化し、ふるさと納税業務の事業をスタートしました。

略歴

一九八七年～現
吹上浜砂の祭典イベント部長他
二〇一〇年～二〇一七年
吹上浜砂の祭典実施本部長
二〇一七年～現
(一社)南さつま市観光協会会長

当初四億円程度だった納税寄付額は現在五十億円(R六年度)、スタッフは十六人(パート含む)、事業費も二十倍以上になりました。さて、このように全国でも珍しい変貌を遂げてきた当観光協会ですが、もう一つ珍しいのは行政の補助金がゼロ、出向職員ゼロということです。つまり、雇用から事業計画・事業執行まで全て独自性をもっていることです。

その一例として昨年、物産・観光・交流施設「きやつたもんせ南さつま」をオープンしました。事業計画から資金調達まで独自の事業です。今後ここをベースにもっともっと楽しい企画を展開していく計画です。

有名な観光地も施設もなく、鉄道や船・高速道路もない南さつま市。過疎化・少子高齢化、限界集落も深刻です。私たちは観光協会という組織を使って活力ある地域に、なんか面白い街に、なんか面白い人がいる街にしたいと思っています。ここが私たちの街だから、他人事ではないから。ここには熱くこの街を語り、なんとかしたいと思っているスタッフと理事と会員がいます。集まってくる仲間がいます。

南さつま市観光協会はこれからも楽しい組織を目指します。



今こそ「不易」と「流行」の視点を

南小(市) 高 味 修 一 郎

一 はじめに

予測困難な社会に直面する今こそ、教育の不易と流行の視点で学校の在り方を考えたい。この二つは相反するものではなく、相互に影響を及ぼし合いながら発展していくものであり、時代や社会の変化に適応しながら、普遍的な価値を失わないように、両方のバランスをコントロールしていくことが、これらの学校づくりにおいて重要だと考える。

二 学校は「命」が最優先

地震・津波災害、豪雨災害、不審者侵入、熱中症対策、アレルギー対応等、学校は子供たちの命と常に直面している。当然のことであるが、校長は子供たちの安全、命を最優先に考え、このことが、様々な教育活動の判断の基盤となる。

子供たちの命を守り抜くことは、学校で最も大切にされなければならない不易の部分だが、一方、命を守るための避難訓練や対応の在り方は、流行の視点でアップデートされているだろうか。学校現場における避難訓練が現実的なものとなっていないことも指摘されている。

三 教師は「授業」で勝負する

例えば、地震の訓練では、余震を想定しているか、停電で校内放送が使用できなくなつた場合はどうするか、悪天候時の集合場所はどこにするかといったことなど、不断の見直しと改善が必要である。最近では、下校中の児童の列に車両が衝突する事故が連続して発生したり、不審者侵入により教職員が負傷する事故も起きたりしている。学校だけでは対応が難しい危機管理事案にどのように向き合うか、これまでの経験に加え新たな視点で最新の知見を校長自らが学び、地域や専門機関と連携して児童の安全を確保したい。

群馬県で校長を務めた斎藤喜博の言葉で、授業に対する教師の責任や使命感が伝わってくる。

担任時代は、「先輩教師の授業に追いつきたい」と、教材研究はもちろん、授業のテンポやリズム、視線、表情、立ち位置を意識して授業に臨んでいた。児童同士で活発に意見を出し合いながら討論する授業に憧れ、様々な研修会にも参加した。児童にとって価値ある授業にしたい、一人一人に力を付けたいと

いう思いは誰もがもっており、そのための準備や指導技術の獲得は不易の部分である。

一方、GIGAスクール構想は流行であろう。一人一台端末は令和の学びのスタンダードと言われ、誰一人取り残すことなく、一人一人の理解度に応じた個別最適な学びが可能となる。当初、学力低下につながるのではないかなどといった消極的な意見も聞かれたが、流行を取り入れることで、不易として大事にしたい部分にも近づく。今では、タブレットを活用して教科の学びを深め、学びの本質に迫る授業がどの学校でも展開されている。これまでの授業実践の成果とICTを組み合わせることで、主体的・対話的で深い学びの授業が更に充実してくるのであり、児童の力を最大限に引き出すことができる。

四 おわりに

教育の不易と流行について、「危機管理」と「ICT活用」の二例を挙げて自分なりの意見を述べさせていた。学校は不易と流行の組合せによって進化・発展していくものが多い。優れた教育実践は、「変わらない部分」と「変わる部分」の組合せで展開される。子供と向き合い、使命感をもち、可能性を引き出したいと願う。そして努力し、悩みながらも前に進む。一方では、時代の流れを読み解き、新たな実践も取り入れ更なる高みを目指す。改革だけを追い求めて迷路に迷い込まないよう、不易と流行の意味を心に刻みながら教育実践を積み重ねていきたい。



離島のなかの離島への配慮を

池地中(大) 前 泊 勝 利

三 県校長会への期待

さらに、エアコンの設置など業者の出張料金が高いこと。陸続きなら数千円で済むところが数万円かかってしまう。

与路小中に勤務しているときに県校長会からのアンケートに先に述べた課題を挙げ、後任校長も挙げてきたが、改善されることはなく、採り上げていただいたこともないように感じる。全体の課題ではないのは分かるが、誰かが赴任しなければならぬことであり、全体の課題として捉え、改善のため県への働きかけを期待したい。

四 おわりに

請島と与路島だけでなく他の島も同様な課題があるのではないかと思う。教育の充実には職員の住環境の充実も欠かせない要素の一つだと考える。「交通や買物は不便だったが、住宅はエアコンや冷蔵庫、洗濯機が備えつけられていて快適だった。」などと言えるように離島のなかの離島に赴任する職員に思いやりがほしいものである。

一 はじめに

本校は四つの有人島からなる瀬戸内町の請島にある。町役場のある古仁屋からは町営定期船で約一時間のところにある。請島は学校のある池地と山を隔てた請阿室の二地区があり、クンマ海岸に代表されるきれいな砂浜の海、ウケユリやウケジママルバネクワガタなどに代表される緑豊かな山と自然豊かな島である。

本校は中三が一人の一学級である。小中併設校であるが令和七年度から小学校が休校して中学校のみとなった。その中学校も今年度で休校の予定である。

二 住環境等の課題

私は大島地区では与論島以外の全ての島に

勤務した。離島のなかの離島である与路島と請島について、その経験から述べさせていた

まず、交通が不便であること。先ほど述べたように古仁屋から町営定期船があるが、週三日は日帰りできない。異動での引越ではコンテナは載せられないので積み替えなければならない。家族が多いと載せられないので海上タクシーをチャーターするので更に出費がかさんでしまう。

次に、食料の購入が不便であること。生鮮食料を売っているお店がないため、週休日に定期船で買いに出かけるかネット注文するかである。これも定期船が欠航になったら困ることとなる。



子供も教師もお互いに成長し合い、

一人一人が輝く学校を目指して ～研修と学力向上の一体化の視点から～

鹿屋小(隅) 上 木 勝 憲

一 はじめに

本校は、大隅半島の鹿屋市中心部に位置し、創立一五七七年を迎える歴史と伝統のある学校である。子供たちは明るく素直で誠実な子供が多い。保護者も教育への関心が高く、学校への献身的な協力を惜しまない地域である。

平成三十年度から、県総合教育センター研究提携校となり、二月にオーブンスクールを開催し、日々の研究実践を県内外に発信している。学校課題は、研修と学力向上の一体化である。提携校としての役割を果たすためにも、持続可能な研修体制の工夫、授業づくりの視点と学力向上の視点の一体化等を図るために、三つの取組について述べていきたい。

二 校務分掌・研修体制の工夫

研修部を第一研修係、第二研修係、学力向上係の三人体制とする。全体理論・運営等は三人で協議し、第一・第二係が説明を行う。第一・第二係は、どちらでも説明ができる状況にする。研修内容と学力向上の関連部分は、学力向上係が説明する。大切なことは、子供たちの力を伸ばすための研修であることと教師の授業力向上を意識して取り組むことである。

三

学力向上部会の再編と過去の財産を活用

学力向上策は、内容や数値目標等の意味付けがなかなか検討されることなく、前例踏襲されることも多い。そこで、今年度、学力向上部会と研修とのつながりを再度確認した。全職員の授業力を向上させるための取組を学力向上部会で協議し、教師は、学びの三構えを意識した授業と見通しの確認・振り返りの実施、習熟時間の確保に取り組む。子供には、心の準備、話の仕方、学習の準備を共通実践事項として、達成率100%で取り組ませることを確認した。

今年度重視したのは、家庭生活振り返りシートの改善である。大切にしたいことは、今あるものの精度を上げること。過去の財産を十分生かし、今の子供たちに本来に必要な項目であるかの視点で検討し、家庭と連携する。過去の財産である資料は、よく分析された項目なので、どの学級でも徹底しやすい内容となり、授業力の向上に役立てられる。また、どの学級もどの教師にも受け入れやすさがある。

四 家庭と連携した自己調整カード

何よりも重要なのは、実践項目の存在理由や数値目標の意味を、全職員で協議し、学力向上策を自分事として捉えさせることである。それが、重要な第一歩、これからの原動力となる。

子供たちの学びの意欲を向上させ、基礎・基本を定着させるために、六・九・二月の年三回を家庭学習強調週間として、各学年の目安時間達成に取り組んでいる。今年度の研修の視点「見通し」の中で、自らの学習定着を調整し、テストの目標値を自ら考えさせ、そのための取組を自分なりにカードに記入させる。自ら自己調整カードに記入する取組により、自分の弱点を振り返り復習に役立て、得点向上につながった子供の例も紹介された。今後は、低・中・高学年に応じたカード作成も視野に入れていく。

五 「鹿屋っ子タイム」の取組

子供の習熟度に応じた補充的・発展的学習を支援するために、昨年度から朝の活動に「鹿屋っ子タイム」を設定し、月・水・木の時間を活用する。単元テストの補充指導や学力調査等の過去問の指導等に生かしている。

六 おわりに

学力向上は一朝一夕にできるものではないと思うが、職員・保護者・地域の総力を結集して、鹿屋小の子供たちのまっすぐ伸びようとする心に灯をともしたい。子供ができたという喜びが次なる目標への大きな力となる。呼応のドラマから生み出される感動を、子供や教師相互の成長につないでいきたい。



目指すは、「過去最高南中！」

国分南中(始伊) 平國弘明

一 はじめに

本校は東国分中学校、敷根中学校が統合開校し(その後も川原・平山中学校が統合)、五十八年目を迎える。霧島市の南東部にあり、北に霧島連山、南に桜島を仰ぎ、天降川、検校川の豊水の流れ込む、錦江湾奥の景勝地にある。本年度生徒数五百十名、二十学級、これまでの卒業生一万二千二百十名を有す学校である。校区内に六小中学校(うち二校休校)、国分海浜公園、上野原縄文の森、国分上野原テクノパーク、また、世界的に有名な企業等もあり、自然、歴史、文化、産業がうまく調和した場所に位置している。職員は年齢構成、経験年数ともにバランスがとれ、世代間の交流も盛んである。さらに、意欲にあふれ、本校教育方針「生徒の可能性を最大限に伸ばす」を理解し、主体的かつ誠実に職務に当たっている。生徒も純粋・素直で、明るく元気に学校生活を送っている。今年度は「過去最高南中！」を合い言葉に、キャッチフレーズ南中5C「Chance、Challenge、Change、Colorful、Create」を指針とし、日々の活動に生徒、保護者、職員が一丸となり、取組を始めたところである。

二 学校経営の基本方針

学校教育目標は、霧島市教育振興計画基本目標「夢を描き高い志をもって学び続け、ともに未来を創る心豊かな人づくり」を踏まえつつ、「夢に向かってあしたを切り拓き、自ら考え、心豊かで、たくましい生徒の育成」、職員研修研究テーマ「生徒・教師が共に学び合い、高め合う『活き要き(いきいき)』とした魅力ある学

三 令和七年度経営の重点

- 校づくり」としている。
- (一) 豊かな心・生活習慣の定着、心に届く生徒指導の充実
 - ア 「自ら考え判断し行動できる生徒」の育成
 - イ 人権教育・心の教育・道徳教育・生命尊重教育の充実と望ましい人間関係づくり
 - エ 発達支持的生徒指導態勢の確立・機能化
 - オ 自治能力を育てる生徒会活動の推進
 - カ 社会性を培う体験学習の充実
 - ク 確かな学力の定着と向上
 - コ 基礎的・基本的な知識及び技能等の確実な習得及び活用
 - (二) 「学習者主体の授業」の創造
 - イ 生徒指導と学習指導の一体化
 - エ 特別支援教育の充実
 - オ キャリア教育の充実
 - カ 家庭との連携による学習習慣の確立
 - キ 気力・体力の向上
 - ク 安全管理の徹底と安全教育の充実
 - コ 心の教育の工夫と充実
 - サ 体力運動能力・健康診断実態把握・活用
 - シ 生徒主体の体育的・学校行事づくり
 - ス 一校一運動の取組の充実
 - セ レジリエンス向上
 - ソ 地域とともにある学校づくり
 - タ 説明責任
 - チ 家庭・地域・関係機関等との緊密な連携・協力
 - ツ 学校運営協議会との連携・協力及び地域
 - (四) 学校運営協議会との連携・協力及び地域

四

(一) 本校の特色ある取組と今後の学校経営展望

- エ 人材・素材の有効活用
- エ 学校便り、ホームページ等による情報発信、他媒体の利用推進
- オ ウェルビーイング環境・業務改善の推進
- ア 本校の特色ある取組と今後の学校経営展望
- ア 常時活動
- ① 年間を通じた計画的な構成的グループエンカウンター(小中連携共通実践事項)
- ② PIA(主体的対話的で深い)ラーニング(学び)(土曜授業での取組)
- ③ ABCタイム(基礎基本定着・入試問題等への挑戦)
- ④ りらくタイム(朝の会時間帯の放送によるリラクゼーション活動)
- ⑤ 南中シエスタ(希望者による昼寝)
- ⑥ 朝ラン(希望者による早朝ランニング)

イ 年間行事の活動

- ① 縄文の森ボランティアガイド
- ② 「国分高校課題探究活動」学習
- ③ 「郷土を学ぶ教育」推進
- ④ 情報モラル教育、SOSの出し方学習
- (二) 学校経営に関する今後の作業
- ア グランドデザイン改編
- イ キャリア教育を柱に加えた経営案策定
- ウ 校区、霧島市の「ひと」「もの」「こと」を活用した「ふるさと学習」の推進
- エ 次年度学校経営案及び教育課程編成方針の作成

五

おわりに

七年ぶりの霧島市での奉職である。この地域を俯瞰して見みると、学校を経営し、教育課程を編成するにあたり、市や市教委の事業を含め、魅力のある「ひと」「もの」「こと」が溢れていることに改めて気付く。今後、それらを活用し、本校生徒、時勢に必要なことを学ぶことができる教育課程を編成するとともに、次世代を担う人財育成に寄与していきたい。また、生徒、職員、保護者、国分南中にかかわる全ての人が最善を尽くすことが、「過去最高南中！」達成に欠かせない。その先陣を切って進みたい。



子どもが輝く「魅力ある学校づくり」

吉野東中(市) 田 中 準 章

一 はじめに

本校は、昭和五十八年に吉野中学校より分離・開校して今年で四十三年目で、現在生徒数は五百五十三名である。校区内には市立少年自然の家や吉野公園、世界遺産の寺山炭窯跡などがあり、教育環境にも恵まれる。

海拔二百〇三百メートルの火山大地として広大な面積を有する吉野地域は、歴史的にも明治の黎明となった大西郷が、明治六年野に下り、師弟とともに鉄を振るい、汗を流し、収穫を喜び、心身の鍛練と後継者育成にいそしんだゆかりの地である。又、現在でも、庭木・草木・野菜等の供給地としての近郊農業が盛んな一方で、鹿児島市街地のベッドタウンとして、住宅地も増加している。

二 取組の実際

学校教育目標は「気付き、考え、行動し、未来を拓く、心豊かでたくましい生徒の育成」。子どもが輝く「魅力ある学校づくり」について本校の取組について紹介したい。

(一) 総合的な学習の時間(地域に学ぶ)

ア 第一学年「地域とつながる」

寺山学習：「世界遺産「寺山炭窯跡」を中心に、寺山の歴史、自然環境、産業、文化について各自課題を設定し、課題解決に向けて情報収集や分析を行う。」(少

年自然の家」での宿泊学習)

イ 第二学年「地域を見つめる」

かごしま未来探究：「地域のリソースと地域企業のリソースを掛け合わせ、地域をよりよくするためのイノベーションプランを考えるプログラムを通して、地域の新しい可能性を見つけ、地域発展のための課題を設定、情報を収集し、多面的に整理・分析し、考えを具現化する。」

ウ 第三学年「地域をおこす」

職場体験学習：「一、二年の探究活動で身に付けた資質・能力を使って、社会のために自分に何ができるか、自己の生き方を考えるための課題を設定し、実際に職場を体験して課題解決のために情報を構造化・抽象化する。」

(二) 地域貢献活動「吉野東の日」

十一月第二土曜日は、自分が属する町内会の公民館や神社、公園の清掃活動などを行い、地域社会を構成する一員として、三年生を中心に全校で地域貢献について考える機会とする。この活動は学校運営協議会の提案で始まり、今年で三回目となる。

(三) 構成的グループ・エンカウンター

安全・安心な風土の醸成のためには、学級に仲間がいて居場所があることが必要で

ある。そのために今年から教育課程に構成的グループ・エンカウンターの活動を位置付け、土曜授業の日に全学年一斉に実施する。今年度は年間五回の計画で、すでに五月に実施し「友達によさが分かった。」「自分のことを分かってもらえて嬉しかった。」等の感想が聞かれた。

(四) 心尽(こころづくし) 清掃

「作業開始十分前」の放送で一斉に遊びをやめ五分前には各々の作業場所の前清掃が始まる。チャイムで本格的に作業開始。雑巾がけでは数人が横に並んで膝をつき、テンポよく拭き上げる。残り三分は気付きの清掃。行き届いていない場所を見つけて仕上げる。無言の縦割り清掃、その姿は美しい。この心尽清掃は生徒たちの誇れる時間であり、主体性と自信を育んでいる。

(五) オフィス兵六(観光ボランティアガイド)

寺山炭窯跡が世界遺産登録されて十年になる。その観光ボランティアガイドとして六年前に誕生し、今年は十五名で活動する。炭窯跡が大雨によって崩落したことから世界遺産と地球温暖化対策をテーマに様々なイベントでガイドを務める。昨年はかごしま環境未来館の「環境フェスタ」や仙巖園駅の開業イベントなどで大活躍であった。

三 おわりに

本校の課題は不登校対策と学力向上である。これらの課題解決のため「魅力ある学校づくり」を研究テーマに掲げ、「居場所づくり」「絆づくり」「学習者主体の授業づくり」に取り組んでいる。生徒一人一人が輝き、笑顔の花満開の学校を目指して、学校・家庭・地域一体となって取り組んでいきたい。



「繋がりづくり」を通した、

心豊かな子どもの育成

水引小(北) 紀 章 子

一 はじめに

本校は、薩摩川内市西部に位置し、北は阿久根市、南はいちき串木野市に接している。平成二十六年度に、五校が統合し、本年度、創立百五十四周年を迎える。児童数は今後減少傾向にあり、現在、七十九人である。卒業生のほとんどが進学する水引中学校と一小一中の小中一貫教育及び五地区コミュニティの代表者を加えたコミュニティ・スクールの取組など、九年間の義務教育及び五地区の特色を生かした教育活動を展開し、地域とともにある学校を目指している。

二 取組の実態

本校では、学校教育目標を「自ら考え行動し、夢に向かって学ぶ、心豊かでたくましい子どもの育成」と設定している。学校は、子供たちの自尊心と自己有用感を育て、ふるさとを愛し、地域に根ざした人づくりの役割を担っている。校区の特色を生かした様々な体験活動に主体的に取り組むことで、子供一人一人の心の豊かさを育むと考える。そこで、本校では、「繋がりづくり」という視点で教

育活動に取り組むことにした。

(一) 縦割り班活動

始業後の朝の時間に、清掃活動を行っている。一年から六年までの異年齢での活動である。自然と上級生が下級生に掃除の方法を教え、時には成果を褒めている姿がある。上級生は下級生の手本となり、下級生は、先輩から学びながら、力を合わせることのよさを体験している。次の掃除の時にもつときれいにするとことを振り返り解散する。気づき・考え・行動する姿がある。異年齢の繋がりである。

(二) 薩摩川内市SDGsチャレンジパートナーシップの取組

本校は令和五年度から薩摩川内市SDGsチャレンジパートナーシップとなり、取組を進めている。日常の学校生活の中での意識化を図るために、関連するSDGsの目標を教育課程に位置付けたり、校内の施設に掲示し、教師も子供も意識して学校生活や学習に生かせるようにしたりしている。特に「教育」「ジェンダー」「海洋資源」

を重点に掲げている。ふるさとコミュニティシヨンの学習では「海洋資源」を取り上げ、県指定の景観学習として、校区の海岸地域を探索し、よさを学ぶ機会となっている。海岸の探索では、この景観があたりまえではなく、誰かが残そうとしないと残らないこと、だからこそ、自分たちができることは何か気づき、考えることができた。夏季休業前には、自分たちができるとして、子供たちが保護者・地域の方々と、海岸の清掃活動に取り組む。地域の自然や環境との繋がりである。

(三) 地域の伝統行事

地域の伝統舞踊に棒踊りがある。三・四年生は地域の指導者に御指導いただき、小中合同の文化祭で披露する。地域行事としての棒踊りでは、該当地域の外からも小学生が参加して、踊っている。幅広い年齢層で交流し、大人は子供を導き育てていった教育風土を感じる行事である。子供と地域の人材との繋がりである。

三 おわりに

水引小の学校の由来は、「水が少なかった土地に川内川の水を引いて田んぼをつくった」とことだという。また、言葉としての「水引」は、「人と人を結びつける」という意味がある。人と人を結び、子供をとりまく全ての方々とともに学ぶことで、心の豊かさを育み、地域に根ざした人づくり、子供の育成に邁進したい。

心に残るひとこと



あなたに任せる

塚脇小(始伊) 榊

朋子

「あなたに任せる」これは、二校前の校長先生に言われた言葉である。当時、学年の係をしていた私が、他の学級の保護者対応について自分の考えを伝えたときのことである。この言葉を聞いた瞬間、これまでの指導を認められたような気がして、うれしく思ったと同時に、責任の重さを痛感したのを覚えている。常に自分の指導に迷いをもち、自信をもてなかった私にとって、とても勇気付けられる言葉であった。続けて、「あなたなら大丈夫」と言葉をかけてくださった。「何かあったら全力で支えるから」という校長先生の気持ちが含まれていると受け取った。無責任ともとれる言葉であるかもしれ

ないが、そうではなかった。その後も放課後にふらっと教室に現れては、何気ない会話で大笑いをした。しかし、その会話の中に解決のヒントがたくさん隠されていた。全力で支えていただいた。いつも絶妙なタイミングと距離感を保ちながら。

さて、この四月に新任校長として赴任し、二か月が過ぎたところである。校長になると、決断を仰がれることが度々ある。その度に、あの校長ならどんな言葉をかけるだろうかと考える。今はまだ、「あなたに任せる」と言えるほどの引き出しと懐の余裕はない。全力でフォローできる資質と能力を備え、自信をもつて言えるよう、日々精進していきたい。

添うてみる勇氣

波野小(隅) 岩 下 勝 也

教師になって現在に至るまで、多くの転勤を経験した。どの学校も、子供たちは明るく素直で、地域の方にも温かく受け入れていただいた。しかし、いつの時代もどんな所にも「目の上

の瘤」的存在の方はいらっしゃるもので、私はそういう方への接し方があまり得意ではなかったし、今でも声の大きい人には苦手意識さえある。

だが、管理職の立場ではむしろ積極的にそういう方々に働きかける機会は多くなる。そのことが、私にとって大きな心の負担に変わっていった。

そんな時、当時の校長先生が「教頭先生、人には添うてみよ、だよ。」とおっしゃった。口に出していなくても私の態度に表れていたのだろう。義務感にとらわれ、いやいや対応していたのを見透かされた気がした。

それからは、意識して苦手だと思っていた方たちに、こちらから話しかけてみたり、努めて笑顔で挨拶してみたりしようと心がけてみた。こちらが腹を割って話せば、相手も真摯に対応してくださる。壁を作っていたのは自分の方だったのだと思い知った。

あの時いただいた言葉は、今も私と共にある。「馬には乗ってみよ、人には添うてみよ。」

新しい出会いがあるたびに、思い出す大切な教えである。

春風を以って人に接し

秋霜を以って自らを慎む

星原小(熊) 米 村 圭 史

父が亡くなって数日経ったある日、遺品の整理をしていると、古びた手帳が一冊見つかった。父が毎日つけていた日記であった。何度も開かれ、使い込まれてきたことが伝わってくる。ページをめくると、その表紙の裏に、丁寧な字である一文が書かれていた。

「春風を以って人に接し、

秋霜を以って自らを慎む」

これは江戸時代末期の儒学者であり、朱子学や陽明学の大家である佐藤一斎の言葉である。春の風のように暖かい心で他人に接し、秋の霜のように厳しい気持ちで自らを律する、という意味である。

それは、まさに父自身を表す言葉であった。父はいつも穏やかで、誰に対しても柔らかい笑顔を忘れなかった。春の風のように、やさしく包みこむような眼差しで人に接していた。しかし、そんな父が自分自身には厳しかったことを、私は子供の頃から感じていた。口では「まあ、ぼちぼちでいいさ」と言っていたが、自分だけに決して「ぼちぼち」では済ませず、地道に

こつこつとやり遂げる人だった。あの姿は、まさに「秋霜」そのものだったと思う。

人はときに、自分に甘く、相手に厳しくなりがちである。自分を見つめてみると案外、自分も人に支えられ、助けられ、時には迷惑をかけながら生きていることに気付かされる。他者との関わり方として考え方が違う場面は多々あるのだが、この言葉のような心の持ち方を大切にしたいと思っている。

この座右の銘を、父は生き方として胸に刻んでいたのだと、手帳を見つけたあの日、ようやく私は気付いた。言葉というのは不思議なもので、亡くなってから、ようやく心の深いところに届くことがある。父の声はもう聞こえない。でも、この言葉が、今も私を支えている。

「自分に厳しく、人にはやさしく。」

「春風と秋霜の間で生きること。」

それが、父から私への、静かな遺言だったのかもしれないと感じている。



あたえられた場所でやるしかない

吹上高 徳 丸 浩 文

本年四月、役職定年されたある校長先生からいただいた言葉。当時、校長職を拝命したばかりの私は、自分が何をすべきかよりも、職責の重圧に不安で悩んでいた。その先生は、一瞬で察したのだろう。ただ一言、「あたえられた場所でするしかない」この言葉をかけられた。

三十二年間、教諭として生徒たちと向き合い、保護者や同僚と協力しながら、教育の現場を歩んできた。そして、教頭として組織運営を学び、今、校長という立場で全体を見渡すようになって改めて思った。完璧な条件が揃うことなどほとんどなく、常に限られた時間、資源、人材の中で、生徒たちのために何ができるかに考えを巡らせる。それは、あきらめではなく、今あるものの価値を最大限に引き出す覚悟と創意の言葉なのだと思っている。

管理職としての仕事は、思い通りにいかないことの連続である。理想を掲げるだけでは物事は動かない。現実と向き合い、周囲の声に耳を傾け、限られた条件の中で最善を尽くすことこそが、教育現場を支える力になると実感している。

もう一つ大切に行っていることが、「自分と意見の違う人こそ大切に」という姿勢である。人は誰しも、意見の食違いに直面する場面がある。多様な価値観が交差する社会においては、意見の違いは避けて通れない。それを否定するのではなく、尊重し、耳を傾け、対立ではなく対話を重んじる姿勢が、生徒たちの豊かな人間性を育む基盤になる。

「正解」を追い求めるよりも、「最善」を尽くす姿勢のほうが、現場にとつて価値があると思っている。限られた状況の中で、時代の変化や意見の違いを受け入れ、今いる場所で、今ある力で、周囲と手を取り合って進んでいこうと思っている。

今後、生徒一人一人が安心して学び、夢を育める学校を目指し、覚悟をもって学校経営に当たっていききたい。

ある日の校長講話



心に残る一冊の本との出会いを

坂元台小(市) 勝 本 祥 治

おはようございます。皆さんは、四月二十三日が何の日か分かりますか。そうです。「子ども読書の日」です。子どもの読書活動についての関心と理解を深め、子どもが読書する意欲を高めるため、二〇〇一年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」に基づいて定められました。また、この日は、「世界図書・著作権デー」でもあり、読書や著作権に関する意識を高める日でもあります。

本を読むのが好きな人?たくさんいますね。鹿児島は、全国でも読書活動が盛んな県です。その読書活動の基盤を作った方が、当時鹿児島

県立図書館の館長だった久保田彦穂さんです。棕鳩十さんと言った方が分かりますね。昭和三十四年に久保田館長は、親子の絆を深めたり、読書の習慣を付けたりすることを目的に、「母と子の二〇分間読書」を提唱されました。この運動は、その後、六十年以上過ぎた今でも、形を変えながら、脈々と受け継がれています。本当にすごいことです。

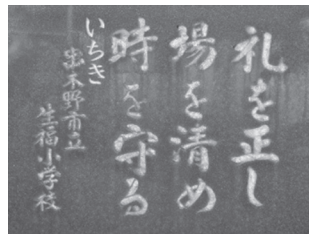
私は、あまり本好きと言える子どもではありませんでした。でも、斎藤惇夫さんの『冒険者たち ガンバと十五ひきの仲間』との出会いが、読書の楽しさを教えてくれ、その後は、少しずつですが、本を読むようになりました。この本は、テレビアニメ『ガンバの冒険』の原作です。テレビで見ていたこともあり、興味を持ち読み始めました。四百ページほどあり、当時の私にとっては長編といえる本でしたが、夢中になって読み進め、あつという間に読み終えたのを今でもはっきりと覚えています。

テレビやゲームもいいですが、読書は、それ以上に楽しく、一生心に残ります。今年は、棕鳩十さんの生誕百二十周年です。この年をきっかけに、「私の心に残る一冊はこの本です。」と、言えるような本と出会ってくれたら、たいへん嬉しいです。まずは、図書館に行き、面白そうだなと思う本を手にししましょう。



どこにあるか知っていますか

生福小(日) 山 田 将 司



にあります。」

すると、数名がうなずいています。

そして、この言葉は、どんな意味なのか、子供たちと一つずつ考えていきました。

「礼を正し」とは、挨拶や返事をする事です。

挨拶や返事は、相手（友達や周りの人たち）に対する思いやりになります。だから、人と人を結ぶすてきなことなので、相手が気持ちよくなる挨拶や返事を、今からできる生福っ子でいてほしいです。

「場を清め」とは、自分たちの周りをキレイにすることです。ゴミなどを一つ拾えば一つキ

レイになり、靴を揃えたら不思議と気持ちがよくなります。それにキレイにすることも周りの人たちへの思いやりとなります。周りを見て、キレイにすることや揃えることに気付ける生福っ子でいてほしいです。

「時を守る」とは、時間を守る事です。時間はみんな平等なのに、誰かが予定時刻に遅れると周りの人は待つことになります。時間を守ることも相手（友達や周りの人たち）に対する思いやりになります。授業や行事などの開始前には姿勢を正し、気持ちを静めて始まりを待てる生福っ子でいてほしいです。

今日も元気に、笑顔であいさつし、身の周りを整え、時間を守っていこうと、

「礼を正し 場を清め 時を守る」

と、全員で唱えました。

次に、二宮金次郎像の写真を見せ、同じ質問をしたところ、挙手する子が多く、名前まで出てきました。

「なぜ、学校にこの像があるのかな。」

子供たちに思考させ、次回の全校集会で再質問することを告げ、講話を終えました。

努力した失敗は、成功にもつながる

名音小(大) 宅 間 万 能

始業式で、努力して失敗しても、それは、失敗ではないと話したことを覚えていますか。これには、モデルになる人がいます。田中耕一さんという人です。（写真を提示）知っている人いますか？ いないかな。では、ノーベル賞という？ 知っている人いますよね。今から二十三年前にノーベル化学賞を受賞した人です。この人の発見のおかげで、がんやアルツハイマーという病気を、早めに見つけることができるようになりました。

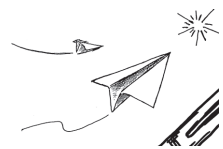
ノーベル賞と聞くと、大学の偉い先生が受賞するイメージですが、この方は会社員で、受賞が決まった時は、工場の作業服を着てテレビに出ていました。田中さんは、薬と薬を混ぜ合わせて、病気を発見する薬を見つけた実験をしていたのですが、ある日、混ぜる予定ではなかった薬を混ぜ合わせてしまいました。実験を失敗してしまったのです。みなさんだったらその後

どうしますか。校長先生だったらすぐにゴミ箱に捨てたかもしれません。しかし、田中さんは、捨てるのはもったいないと思って試してみたら、実はそれが大正解だったのです。ただ田中さんが発見にたどり着くまで使った時間は、三年から五年と言われています。その間何千時間にも及ぶ実験が行われ、それだけ失敗も繰り返されたことでしょう。

実は、歴史的な発見は、このように多くの努力を続けて偶然失敗したことがきっかけで、発見につながったということが多いのです。ただどれだけ失敗したとしても「どうしてうまくいかなかったのか。」を考え、あきらめずに続けることで、新しい何かを発見することにつながると言えるのです。

一つの失敗が、成功に一步近づいていると考えると、何かワクワクしてきませんか。努力した失敗は、成功につながることもある。失敗まで愉しめる気持ちになった時、予想もしない何かが生まれるのかもしれないね。

のひろば



自然体験活動と

児童の自己肯定感

大川内小(北)

有川 武

大川内小は、この度、学校林等活動コンクールにおいていくつかの賞を受賞させていただいた。これは、本校がこれまで

で地域の方々の協力を得て取り組んできている炭作りや椎茸栽培、それらに付随する植樹活動等を評価していただいたからであろう。昨年度末には、あらたに卒業生が一人一本ブルーベリーを卒業記念として植樹した。また、昨年度から、伝統野菜である出水在来落花生の栽培活動にも取り組んでいる。

炭作りには、ウバメガシやカシ、ミカンの木を使用している。子供たちは木の種類や特徴、原木と炭の重さや体積の違い、炭の効用などを

自分の設定した課題をもとに調べ、パンフレットにまとめたり、学習発表会の発表内容に取り入れたりしている。椎茸栽培にはクヌギを、中学生と合同で行う紙漉きには梶を使用するなど、色々な種類の樹木に触れることができるのもこれらの活動の魅力の一つであろう。今年度は、図工の時間に「木育」の視点を取り入れた学習活動も計画しているところである。

大川内小のすぐそばを流れる米ノ津川での活動も、本校の特色ある教育活動の一つである。全児童がライフジャケットを身に着け、保護者や地域の方々の安全見守りのもと、川の流れを楽しんだり、生き物を探したりしている。川でのカヌー体験も子供たちは楽しみにしている。理科や図工の学習での活用も効果的である。さて、本校の課題の一つが、児童の自己肯定感に関するアンケート結果が国や県の平均値よりも低いことである。本校では、前述したとおり、様々な自然体験活動に取り組んでいることから、自己肯定感向上にも効果的であろうと考えていたが、結果として表れていないことが明らかになった。

そこで、今年度は、一つ一つの自然体験活動を価値付けるため、授業終末の振り返りの時間をより大切にしていきたい。それぞれの活動を通して、よかったことやがんばったことなどを前向きに捉え、子供たちの自信ややる気につなげていきたい。

自然体験活動を通して子供たちが自ら探究し、失敗や成功を経験して、自信や自尊感情を育み、自己肯定感を高めていきたい。

花を育てると

いうこと

早町小(大)

西 島 常 徳

奄美市の小中併設

校に教頭として勤務

していた時、市の事

業である「花づくり・

花いっぱい運動」に

取り組んだ。年に一

回、十一月に開催されるコンクールに向けて、各学校はそれぞれの環境に応じた取組を行っていた。

当時、花づくりなどしたことのなかった私は、

不安というより重荷を背負われた気がした。しかし、職員の中にベテランの緑化担当がいたので、一緒に活動させてほしいと願い出た。

担当と花を育てながら、多くのことを学ばせてもらった。まず、同じ種類の花でも全く同じ

花は一つとしてないということだ。同じ花でも支えが必要な花もあれば、支えがなくてもたくましく成長する花もある。それぞれ個性がある。

私は水をかけすぎて苗を枯らしてしまうなど失敗も多かった。花の性質を見極め、適切な時期に適切な分量の肥料を施す必要性を学んだ。

しかし、どうしても避けられない危機が訪れる。それは台風である。今でも忘れられない出来事がある。担当職員と三日がかりで苗を定植し終え、ほっとした日の夕方のニュースで、来

週は台風到来とのこと。私は正直残念ではあるが仕方ないと諦めた。ところが、翌日学校へ行ってみると担当職員が、降りしきる雨の中、移植ごてで植えた苗を一つ一つ根を傷つけないように丁寧に掘り起こし、一輪車へ運んでいる光

景を見た。その瞬間、衝撃とともに自分を恥じたのを記憶している。数か月後、その苗は全て

ではないが、その愛情に込めるかのように元氣な鮮やかな花々が咲かせてくれた。それを見たとき、感動が胸に込み上げてくるのを感じた。

花づくりの知識や技術も大事だが、育てることとは根底に愛情が必要だと感じた。花は見る者の心を癒やすと言われるが、自分が育てた花が成長し、無事に咲けば、誇らしく感動すら覚える。

個人的には単種類の花々より、複数の種類のいろんな花々が咲き誇っている方が美しいと思う。

花づくりは学校経営へのヒントが多い。子供たちなりの花をしつかりと咲かせるために学校が果たすべき役割が見えてくる気がする。

人と人の

「つながり」を大切に

有明中(隅)

田 中 純 朋

この春、新任校長として志布志市立有明中学校に赴任することとなった。奇しくもこの地は私が生まれた地であった。

また、花づくりなどしたことのなかった私は、

というのは、小学校の教諭だった私の父親（一昨年に死去）の初任校が、有明小学校だったのである。更に驚いたのが、本校の学校運営協議会の会長が、父の教え子だったということである。赴任して早々に挨拶に伺ったときに、その事実を会長ご本人から聞かされ、運命的なものを感じるとともに、この地で有明の子どもたちのために頑張っていこうと決意を固くしたのだった。

これまで、私は七つの中学校で勤務させてもらった。そのどの中学校でも、生徒だけでなく保護者や地域の方との「つながり」を大切にしてきた。そうすることが、自分の働きやすさに繋がるとともに、何よりもその地を楽しむことができるからである。その地の方々と「つながる」ためには、「飲ん方」に参加し、よく語ることが一番の近道と考える。そうすれば、こちらが困った時やお願い事が出てきた時に、頼みやすくなるのである。学校は、地域の方々の協力なくしては成り立たない。生徒の健全育成も、地域のコミュニティに頼るところが大きい。本校の例を挙げると、有明校区コミュニティは、

中学生が企画運営する「こどもまつり」や「敬老ふれあい元氣まつり」を行っている。地域の方々が補佐しながら、生徒たち自身でそれぞれのまつりを成功させる体験を積ませてくださるのである。この活動に、本校の生徒も積極的に取り組んでいる実態がある。また、海に近い通山校区コミュニティでは、「海岸清掃」や「海亀放流」などの体験活動を行ってくださっている。いずれも両校区のコミュニティ協議会が組織から運営までしっかりしているからこそ行える活動である。

以上述べてきたように、学校教育には人々との「つながり」がとても重要と考える。私自身も、これまで築いてきた様々な方々との「つながり」を大切にしつつ、自分が生まれたここ有明の地で、地域と一体となって学校経営に取り組んでいきたい。



読書案内



■ 立花龍司 著

大谷翔平のバッティング解剖図鑑

大浦小(南) 吉 見 一 弥

少年時代、野球漫画ドカベンが好きだった。

本塁打を驚異的に量産する主人公に憧れ、夢中になって読みふけていた。あれから半世紀。

ドカベンを遙かに凌ぐ選手が現れた。大谷翔平選手だ。MLBでの五十一五十達成は、異次元の大偉業だ。私は漫画を超越した大谷選手の活躍に毎日心を踊らせ、学校でも、大谷選手をテーマにした講話をよくしている。

大谷選手関連の書籍は多くあるが、書店で本書が目にとまった。著者は立花龍司氏。プロ野球のトレーニングに革命を起こし、野茂英雄氏も師事した名トレーナーだ。立花氏が大谷選手の打撃をどう分析したのか、野球好きとしては大変興味深く、本書を手にとった。

世界最高峰のMLBで、なぜあれだけの圧倒的な結果を残すことができたのか。その要因は、地道なトレーニングによる大幅な筋力アップが挙げられる。しかし、著者が注目したのは、打撃フォームの大変換である。詳細な分析により、打撃動作の一つ一つが、本塁打を打つことに特化していることを解明した。それは、日本野球界の常識とは正反対であり、取り入れた日本人選手はこれまでになかった。

本書では、「先入観は可能を不可能にする」という大谷語録を紹介している。大谷選手はこれまで、「あのフォームでは、MLBの本塁打王は無理」など、先入観による否定的な批判を数多く浴びてきた。しかし、「世界一の野球選手になる」という目標から一切おれず、科学的根拠をもとにフォームを一から見直した。その結果、MLBでも、本塁打を量産できるフォームを身に付けることができたのだ。

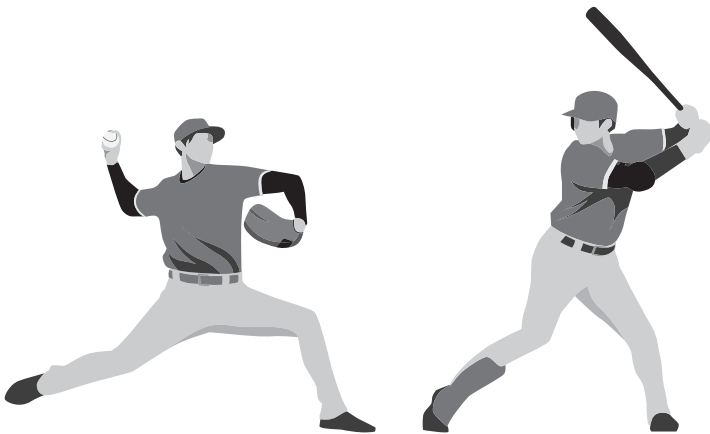
そこには、常識や先入観にとらわれず、自分

の道を突き進もうとする強靱な意志の強さが感じられる。だからこそ、数々のけがや手術も乗り越えて、進化し続けているのだ。

最後に、こんな大谷語録も紹介されている。「人生が夢をつくるんじゃない。夢が人生をつくるんだ。」

夢に向かい挑戦し続ける大谷選手の言葉を、子供たちにもぜひ伝えていきたい。

株式会社エクスナレッジ 千四百円＋税



■ 栗山英樹 著

栗山ノート2

世界一への軌跡

種子島中(熊) 吉松 孝 展

前WBC日本代表監督 栗山英樹さんの本は、日本ハム監督時代のものからよく読んでいます。「伝える」「未徹底」「最高のチームの作り方」など、その中でも二〇二三年三月のWBC優勝を果たした直後の「栗山ノート2」には、チーム作りにおける多くの言葉が書かれていた。栗山さんの本には、古代中国の書物「易経」、洪沢栄一さんの「論語と算盤」、吉田松陰先生、森信三先生、稲盛和夫さんなど、多く引用されている。

この本の中で深く心に残った言葉がある。「人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎないときに」「無私道(むしどう)」「尽己(じんこ)」そして、大谷翔平選手が決勝戦の前に話した「憧れるのはやめましょう」の言葉で、巨大な敵を前にしても怯まず、臆せず、気後れせず、ためらわず、

敢然と立ち向かっていった「確乎不拔（かっこふばつ）の志」など。

そして、種子島中学校のスローガンになっている言葉である『「歩前へ」』。天からの封書を開かないままに人生を終えてしまう人がとても多い。天から与えられた才能なんて自分にはない、そう思っている人がいるかもしれない。自分にできることはすべてやり尽くそう。あなたにも私にも届いた封書には「精一杯の自分を目指しましょう」と書いてあるに違いない。できるか、できないかではなく、とにかくやってみる。十センチでも、二十センチでもいい。一歩踏み出した自分を褒めて、明日は二十センチ踏み出してみませんか。

現在は、栗山英樹さんの書籍の集大成とも言える「監督の財産」を愛読中である。全八百四十五ページで辞典のような分厚さがある。野球の世界の話が中心ではあるが、指導者には大変参考になり、仕事・役割・選手との関係・人事そして能力までが網羅されたバイブルのような一冊である。これからも一日十五分読書が続けていく。

株式会社光文社 千六百五十円

■ 司馬遼太郎 著

菜の花の沖

種子島高 切手 浩 隆

「菜の花の沖」は司馬遼太郎の代表作の一つである。司馬遼太郎といえば「龍馬がゆく」や「坂の上の雲」が有名だが、淡路島で生まれ貧乏で悲惨な境遇にあった高田屋嘉兵衛が、船乗りから廻船の船頭へ、さらには、北前船で大活躍する大商人と成長していく姿を描いたこの作品は、玄人受けする名作といえるのではないか。全六巻からなる長編で、単なる嘉兵衛の成長物語にとどまらない。

鎖国しながらも、江戸時代中期から末期にかけて北前船とともに確立される経済・物流の様子とその寄港地での賑わい、幕府と商人の関係、潮・気候・地形を踏まえた帆船の操船技術、海・風・岬など雄大な自然への畏怖などが壮大なスケールで描かれている。読み進めていくとあたかも自らが北前船で日本海を帆走、あるいは寄港地で商いをしている、そんな錯覚に陥る。

また、幕府から任された蝦夷地開拓や商取引

を成功させるため、嘉兵衛は「皆人ぞ」という言葉とともに仲間と協力して多くのことに取り組んでいる。幕府との交渉やアイヌの人々との協力が不可欠なことをよく理解し、特にアイヌの人々を尊重し、大事にした場面が多く描かれている。

江戸時代中期以降、千島列島に度々接近してきた大國ロシア。その事実を幕府も認識しつつ、発せられた「異国船打払令」。これを背景にゴローニン事件が発生。ロシア・ディアナ号艦長が日本に捕らえられた報復として、帆走中の嘉兵衛がロシアに拿捕されカムチャツカに連行。嘉兵衛は約一年間幽閉されながらもロシア語を覚え、さながら外交官のような正義の交渉を行い、結果としてゴローニン・嘉兵衛ともに釈放、お互いの母国に帰国、一件落着となった。その後、嘉兵衛には幕府から褒美金五両が与えられた。嘉兵衛の懐の深さや、いかほどか。

「菜の花の沖」は、教育現場で悪戦苦闘する私に生き様はもちろん、自然・歴史・協働・文化・人権・正義など人生という大航海を乗り切るために必要な全てを教えてくれた、秀逸無二の名作である。

文春文庫 八百六十九円

私の趣味は、格闘技観戦、格闘技や武道を学ぶことです。少年時代から海外の映画スターのアクション映画をテレビ画面や映画館で鑑賞し、鑑賞を終えると、何か自分がアクションスターのように強くなった錯覚を味わいながら、燃えたぎる何かを感じていたような覚えがあります。元来、運動好きの私は、中学・高校では武道とは違う部活動に入部し、部活動に精を出す傍ら、格闘技や武道の書籍を買いあさり、いつの日か格闘技や武道を学びたいと心に秘めていました。

県外の大学進学を機に、初めて見聞した日本拳法部に入部しました。日本拳法とは、防具（面・胴・股当その他）とグローブを着用し、打撃技、投技、寝技を駆使して勝敗を競い合う武道であり、日拳（につけん）と略されて親しまれています。武道・格闘技・スポーツの側面を持っています。

さて、長年心に秘めていた格闘技の世界に足を踏み入れましたが、私以外の部員は、高校時代まで日本拳法部で全国で活躍した人が大半を占め、初心者は私のみという部員の構成でした。さらに、部員数が少なく、早急に団体戦のメンバーの一員となるように、基本からゆっくりと、丁寧な指導をいただけるような状況ではありませんでした。長年心に秘めていた念願の格闘技の世界でしたが、日々の部活動は壮絶な内容の稽古でした。私のパンチや蹴りは当たらぬ、殴られ、蹴られ、投げられ、痛みに耐え

る時間と日々が過ぎました。

一日だけ退部を考え、無断欠席してしまいました。監督から諭され続行しました。大学最後の全国大会では試合で勝利することもでき、続けてよかったとの思いで、格闘技の世界から卒業しました。

体育教師として本県で勤めながらも、断続的に空手道を嗜んでいました。

この度、中種子町立中種子中学校長を拝命し、私の人生で初めて、種子島の地を訪れ、中種子町での生活が始まりました。本校入学式辞で新生入生に、『日々挑戦』、昨日までの自分自身

私の人生を彩る趣味について

中種子中(熊)竹村政樹

に挑戦しながら。」との言葉を贈りました。本校の先生方にも常日頃「挑戦」という言葉かけをしております。果たして、私自身は「挑戦」しているのか。言いつばなしでいいのか。私も何かに「挑戦」しようと心に決めました。

居住地の近くで、キックボクシングを学ぶことが出来る場所があることを知り、先ずは体験させてもらいました。初めての事に取り組む時のあの緊張感。久しぶりに味わうことができました。

体育教師です。何かしらの運動は継続していましたが、一年前に、腰の骨折を患い、久しぶ

りの運動でした。準備運動の縄跳びで息が上がり、軽めのミット打ち、ミット蹴りでしたが、腕が、脚が、すぐに重くなり、上がらなくなりました。言うことを聞いてくれない身体には、少しの不安を感じましたが、何とも言えない達成感・爽快感を味わい、入門しました。

職場、職種の関係のない方々との出会いも、生活に潤いを与えてくれます。先日キックボクシング場で初めてお目にかかる（本当は違ったのですが）若い男性は、体格も良く、キックボクシングだけではなく、様々な格闘技に精通している風貌、動きの方でした。その男性からいきなり、「ミットで受けましょうか、竹村先生。」と声をかけてもらいました。「気付きませんか、〇〇中学校でお世話になった〇〇です。」と。中学生当時の面影は少しはあるものの、立派な体格、精悍な顔

つき、思い出すのに少し時間を要しましたが、パンチや蹴りをミットで受けてもらいながら指導してもらった中で、彼の中学生当時の姿が蘇ってきます。奇跡的な出会い、本当に幸せなひとときを過ごしました。

一度きりの人生を謳歌し、奇跡的に出会わせていただいた同僚（仲間）と共に人生を謳歌し、自分の人生に責任を持ち、人を喜ばせ、愛されることをモットーに、中種子町の生徒の教育のために、微力ながら、様々な事に「挑戦」しながら、尽力いたします。

郷土の紹介

孔雀^{かつば}闊歩し、活火山のエネルギーあふれる、平家ゆかりの歴史薫る島

硫黄島

三島硫黄島学園(郡) 中村 真人

一 学校・校区の概要

硫黄島は、鹿児島県三島村に属し、薩摩半島の南南西、鹿児島港から約百八キロメートルの洋上に位置している。島の東側には、霧島火山帯の一部である活火山・硫黄岳があり、その雄大な自然と湧き出る温泉が特徴的である。神秘的な七色の海岸線や黄金色の港は、訪れる人々に大きな感動を与える。

三島硫黄島学園は、島の港から徒歩五分の距離にあり、令和元年に「三島小・中学校」から改称し、現在六年目を迎える。児童生徒数は二十七名で、そのうちしおかぜ留学生が九名在籍している。

二 島を闊歩するクジャク

島内では野生のクジャクが自由に歩き回り、その鳴き声が響き渡る。かつてリゾート開発のために持ち込まれたクジャクが野生化し、現在の個体数は不明である。中には白いクジャクも確認されており、「白いクジャクを見た人は幸運に恵まれる」という伝説がある。

三 八朔太鼓踊り・メンドン

八朔太鼓踊りの起源は定かではないが、「慶長三年、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、島津義弘に従った硫黄島の従軍者が戦功を立てたことを祝うために奉納されるようになった」とされている。踊りは鉦^{かね}を持つ歌い手二人と踊り子十人ほどで構成され、地域の男性が二週間前から練習を開始する。本学園の後期生男子も参加する。

特異な存在である「メンドン」は竹箆を利用して作られた鬼の面で、踊りに出ない男性がかぶり、見物人を追いかけるなどして賑わいを創出する。踊りの最中には前期生男子による「コメン」も登場し、地域全体で盛り上がる催しとなっている。この踊りは旧暦八月一日と二日に熊野神社に奉納された後、各所を巡る。



八朔太鼓踊りは鹿児島県指定文化財、無形民俗文化財となっており、「メンドン」はユネスコ無形文化遺産に登録されている。

四 俊寛・安徳天皇の来島

平清盛が、平氏打倒の陰謀に関与したとされる俊寛らを鬼界ヶ島(現在の硫黄島とされている)に流刑したのは治承元年(一一二七)で、その翌年、後の安徳天皇の安産祈願による恩赦で俊寛以外の二名は赦免されたが、俊

寛は許されることなく島で亡くなり、島民は彼を哀れみ、俊寛堂を建立して祀^{まつ}ったとされている。令和六年には、この物語を題材にした歌舞伎「俊寛」が中村勘九郎丈によって十三年ぶりに硫黄島の野外ステージで披露された。また、壇ノ浦の戦いで海中に果てたとされる安徳天皇が、硫黄島に落ち延びたという説もあり、関連する史跡や史料が多数存在する。



五 島の生活と教育

硫黄島の生活は、週四便の定期船の運航に左右される。島には「信号機」や「コンビニ」がなく、現代の都市生活とは異なる環境である。しかし、豊かな自然と歴史、文化に恵まれ、島民同士の助け合いの精神が根付いている。児童生徒は年長者を敬い、年少者を気遣いながら共に成長していく。島民も児童生徒を大切にし、「島の宝」として見守っている。特色ある「ジオ科」などの教育活動を通じて、児童生徒の郷土愛を育み、高校がない島での十五歳の「島立ち」に向け、自律した学習者を育成するために、学校経営を進めている。

参考資料 三島村誌 三島村ホームページ

いい旅は、活力の素を 与えてくれる。

感銘を覚えたことから
自分の中に新しい生活
の知恵が加わる。それが
旅の楽しみである。



千座の岩屋

© K.P.V.B

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史氏



一般財団法人鹿兒島県校長会館だより

令和七年度、一般財団法人鹿兒島県校長会館としての登記が六月十六日に完了し、六月二十六日に県知事宛てに「公益目的支出計画実施報告書」を提出しました。本年度も月刊「鹿兒島の教育」等の広報資料を刊行するとともに、新たに教育講演会を日本教育会鹿兒島県支部と共催で開催し、本県教育の充実・発展に努めます。

校長異動

○新任 令和七年七月一日付

奄美市立笠利中学校

淵脇 哲也氏

(前奄美市立笠利中学校教頭)

教育長異動

○新任 令和七年七月一日付

長島町 大野 憲久氏

(前長島町立鷹巣小学校校長)

編集後記



熱中症警戒アラートが六月下旬から発表され、暑い日が続いています。残暑も厳しいという予報も出されています。先日の新聞で「全中 熱中症特別警戒で中止」という記事が掲載され驚きましたが、「競技を全て終えられない可能性はあるが、子どもの命を守ることに最優先」という日本中体連のお考えには納得いたしました。本校でも、これから十月上旬までの教育活動を安全に実施できるように万全の対策を講じなければと考えさせられました。

さて、夏休みです。昨年の夏はパリオリンピックを楽しんだのではないのでしょうか。今年の夏は大阪・関西万博が開催されています。万博のテーマは、個々が持つ多様性を認め合い、それぞれの「いのち」が輝くような未来社会を世界中の人々が共に考え、創り上げていくという思いを込めて「いのち輝く未来社会のデザイン」、コンセプトを「未来社会の実験場」としています。ぜひ、私も世界中の様々な分野の最先端技術や社会システムを体験したい。そして、子供たちに、未来社会の可能性やグローバルな視野を広げられるような話を提供したいと思っています。

鹿兒島の教育の読者の皆様の夏休みが、日頃の多忙から少し離れて、御家族や御友人の皆様との触れ合いや普段はなかなかできないことに挑戦する時間になりますように祈念しております。

最後になりましたが、今月も御多用の折、玉稿をお寄せくださった校長先生方に熱く御礼申し上げます。

山里 浩美(宮小学校)